

238. 平成7年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その1)

本年度も、恒例の「第68回滋賀県埋蔵文化財センター研究会」が去る平成8年3月8日(金)、埋蔵文化財センターで開催されました。

ここに、県下における数多くの発掘調査成果の一端を紹介いたします。今後の参考に活用いただければ幸甚に存じます。

なお、御多忙にもかかわらず、御協力いただきました方々に御礼申し上げます。

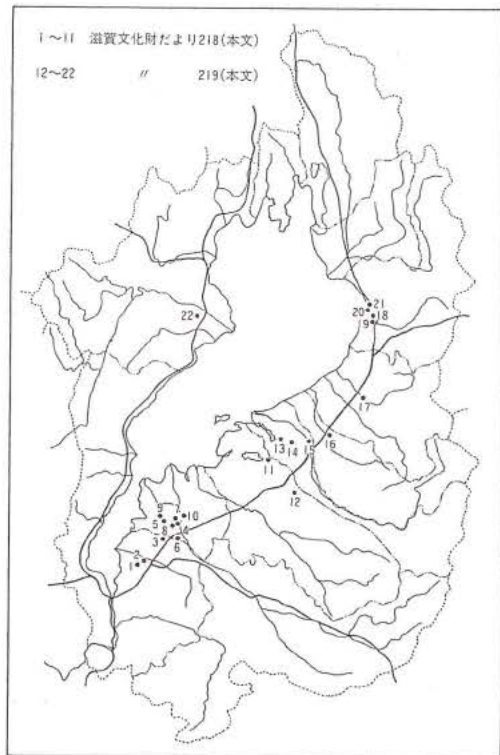
1. 噴砂跡および古墳時代の竪穴住居跡を検出 草津市御倉町 襖遺跡

襖遺跡は、これまで草津川改修事業に伴い何度も調査が行われた遺跡で、遺跡の全容が明らかになりつつある。今年度は、2地区で調査を実施した。

まず、新草津川右岸側に位置するA区では、古墳時代の溝跡、土坑等と、律令期以降の掘立柱建物跡が検出された。この他に、遺構面上に地震による液状化現象に伴う噴砂の跡が認められた。噴砂跡は、以前に行われた周辺地の調査でも確認されていて、今回検出されたものは、遺構面での幅が、割れ目程度から20cm程度までさまざまである。また、噴砂跡の延びる方向は、南北方向を中心として、約12mの幅で何条も不連続に認められる。断面の観察では、最深部で遺構面下60cm



噴砂跡(長くのびる白線の部分)



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです)

から噴出されている。噴砂跡の検出された面は、柱跡、溝跡等の多く検出された面から一段下がった面で、噴砂が上の面まで達していたかどうかは、断面の観察でも微妙である。また、噴砂跡と遺構との重複が認められないことから、時期の特定は困難である。

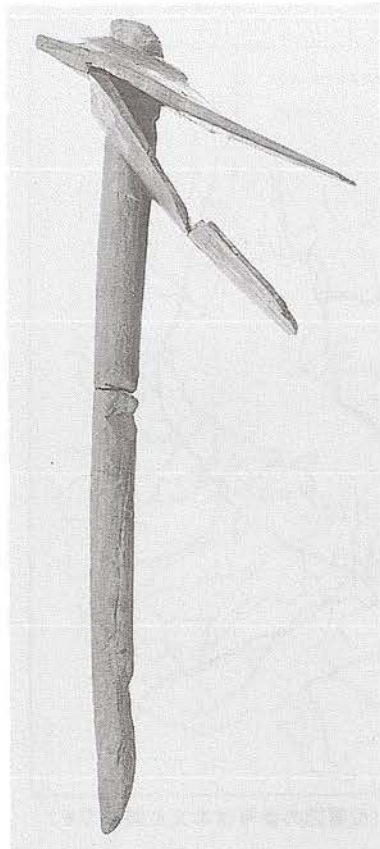
次に左岸側のB区は、前年度の調査区の東側に隣接する地区で、調査区の北側には、前年の調査区から連続する旧河道が存在する。旧河道の南側は砂地のベース面となり、溝跡、土坑等が検出された。調査区の南端に至って、ようやく住居跡等の検出される遺構面が存在し、ここからは竪穴住居跡4棟、柱跡、溝跡等が検出された。住居跡のうちのSH1からは、東辺中央部より造り付けカマドの痕跡が検出され、前回の調査例に引き続き類例を確認することができた。この住居跡からは、7世紀前半代の須恵器坏身と円面硯等が出土した。住居跡群は、概ね6世紀代から7世紀前半代に

構築されたと考えられ、その廃絶後に掘立柱建物集落が営まれると推測される。これらの集落跡は、今回の調査区の南側に広がって行くものと思われる。

(草津市教育委員会 藤居 朗)

2. 泥除け付き広鋏が出土

草津市木川町 中兵庫遺跡



泥除け付き広鋏

中兵庫遺跡は、草津市木川町地先に所在する。同遺跡は、前年度までの調査で、弥生時代後期後半から古墳時代前期および中世の遺構や遺物が確認されている。

今回の調査は、県道建設に伴う事前調査で、調査面積は6,000㎡である。主に弥生時代後期から古墳時代前期と鎌倉時代の遺構や遺物が確認された。前者には、井戸、方形周溝墓、土坑、溝などがある。

井戸は、旧地形の微高地から低地への変換点に20基以上造られている。それらは、木器や木器の未製品が出土するもの、自然の巨木が出土するもの、大量の土器が投棄されるものや井戸の底から完形の土器が出土するものなどがある。

泥除け付き広鋏が出土した井戸は、調査区の中央付近に位置する直径約2m、深さ75cmを測る円形の井戸である。鋏はその中に投棄されるような状況で出土した。広鋏の柄の長さは残存長65cm、広鋏部分は長さ26.5cm、残存幅16.5cm、泥除部分は長さ24.5cm、幅25.5cmを測る。泥除け板が広鋏に装着した状態で出土した例は、福岡市那珂久平遺跡に次いで全国で2例目であり、近畿地方においては最初の例となった。古代の農耕具の変遷を考える上で貴重な発見であるといえる。

方形周溝墓は、旧地形の微高地東側に相当する部分に集中し、10基以上存在している。墓の主体部は、後世の削平によってすべてなくなっており、区画する溝のみを確認した。これらの周溝墓は、5m四方から16m四方までの大きさである。この中には、縄文を施文した特殊な甕を供献したものなどもある。

今回の調査で検出した遺構や遺物は、湖南地域の弥生時代末頃の集落を考える上で重要な成果であったといえる。(助滋賀県文化財保護協会 中村 健二)

3. 郡衙級の官衙遺跡の一部か

栗東町手原口 手原遺跡

手原遺跡は、JR草津線手原駅周辺に広がる、縄文時代から中世にいたる複合遺跡である。遺跡周辺には正南北方向の地割が広がっている。十数年来実施されている発掘調査では、古代から中世の掘立柱建物群が発見されている。

1995年7月から10月にかけて、民間の造成工事に伴わない856㎡にわたり実施された発掘調査では、縄文時代から中世の遺構・遺物が出土した。

発見された遺構のうち、古代のものには、掘立柱建物・塀・井戸・土坑がある。掘立柱建物は5棟みつかっており、3期の変遷が考えられる。建物の規模は6間×2間、7間×2間などの桁行が長いもので、ほかに柱掘り方が1.2mを測る東西棟が部分的にみつまっている。塀は14間(30m)以上におよぶ東西方向のものである。これは何らかの区画施設と考えられる。井戸は素掘りで、掘り方の直径が230cm、検出面からの深さは約110cmである。須恵器杯蓋・身・礎などが出土している。

中世のものには、掘立柱建物が4棟以上発見され、3時期の変遷が考えられる。柱穴および周辺の包含層から出土した土師器・黒色土器等の遺物から、12世紀から13世紀の集落であると考えられる。

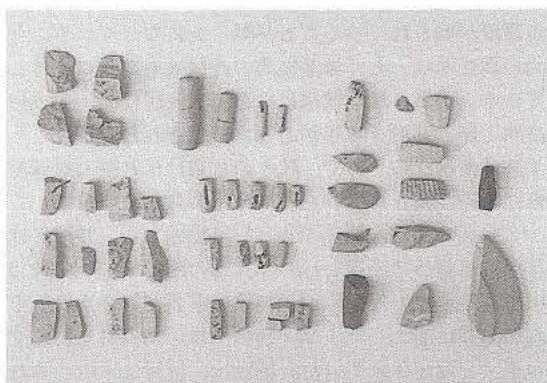
今回明らかになった古代の遺構は、奈良時代後半を



古代の掘立柱建物群

中心とする時期のものである。建物群は規模が大きく、堀を伴うなど広域にわたる企画性があったことをうかがわせる。手原遺跡では今回の調査区の南側一帯にも、柱筋を揃えた倉庫群や、庇付の規模が大きい東西棟などを、企画性をもって配置しており、今回の建物群の状況を考え合わせると、官衙的な性格を考えることができよう。(駒栗東町文化体育振興事業団 雨森 智美)

4. 碧玉製石鉏出土の玉造り関連工房
栗東町辻 辻遺跡



玉造り関連遺物

今回報告する調査は、区画整理事業に伴う辻・高野遺跡の第3次調査で、1995年4月から1996年3月にかけて行われた。今年度の調査区は辻遺跡に含まれる。

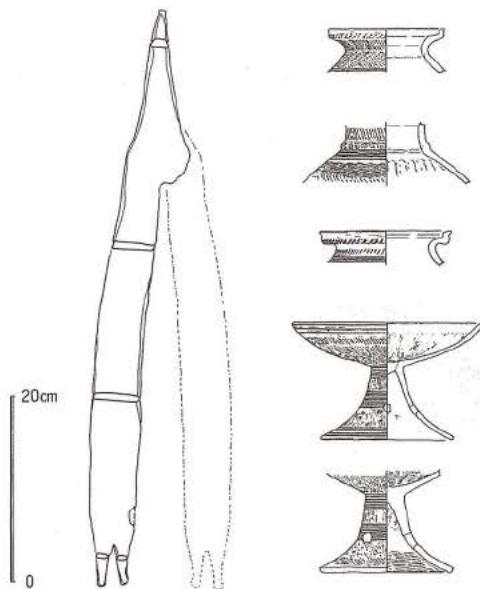
遺構・遺物は、上層面と下層面の2面で確認されている。下層面では、縄文時代後期から晩期にかけての竪穴住居1棟、落ち込み、土器溜まり等が確認された。上層面では、玉造り工房を含む古墳時代前期から後期の竪穴住居29棟、白鳳時代の竪穴住居1棟、奈良時代後半から鎌倉時代前半頃の掘立柱建物30棟以上等が確認されている。この中で注目されるのは、碧玉製石鉏片や玉造り関連の遺物が出土した古墳時代前期(4世紀後半～5世紀初頭頃)の竪穴住居(工房)である。工房と考えられる竪穴住居は2棟存在し、1号工房とするSH-3は、2本の支柱穴をもった不整形の竪穴で、南辺に土坑とピットが存在する。ピットには砥ぎ汁と思われる白い沈殿物が堆積していた。玉類等の材質は碧玉製と滑石製があり、碧玉は硬質と軟質に分けられる。管玉の未製品は、形割、側面打製、研磨、穿孔、仕上げの5工程の遺物が全て存在している。その他、紡錘車形石製品や筒形石製品(太い管玉?)等が出土している。工房では、玉類の他に腕飾類等も製作していた可能性が考えられる。しかし管玉以外の遺物には、仕上げ段階の遺物しかみられないことや、石鉏の割れ口を観察すると、ミガキや打裂した跡がみられ、新たに再加工したものが一部みられることから、製品とし

て成立しなかった失敗品を、原石と同様に他地域から運んできて、玉類に再加工していた可能性も考えておきたい。いずれにせよ、野洲川流域の下長遺跡や野洲川左岸遺跡の竪穴住居から出土している石鉏の問題も含めて、辻遺跡の工房から出土した石鉏は、今後流通の問題を解く重要な鍵となるであろう。

(駒栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

5. 弥生時代後期居住域の南東側で河川調査
栗東町野尻 伊勢遺跡

野洲川左岸沖積平野の微高地上に立地する伊勢遺跡では、これまでに主に守山市により調査が実施されていて縄文時代後期から近世に至る遺跡であることが確認されているが、特に弥生時代後期には大型建物群や方形区画が存在するなど傑出した内容を備えた集落であることが判明してきている。その弥生時代後期の居住域は守山市伊勢町の現集落を中心に東西700m、南北400mに推定され一部栗東町大字野尻にも及んでいる。その野尻地区では1994年の調査で3×1間で屋内棟持柱を持つ大型掘立柱建物や居住域南東を限る河川跡を検出している。今回の調査はその河川跡の西側下流部分を約100㎡の面積で実施した。川幅は約7～8m、深さ1m、現地表面からは1.3mで、堆積土層は上層から粘質土層砂礫層、スクモ層に大別され、上層からは中世から古墳時代前期に至る遺物が出土し、下層の砂礫層・スクモ層からは弥生時代後期の土器、木製品の出土をみた。木製品は建築部材の他、直柄横鋏や曲柄又鋏などの農具が出土。図示した曲柄又鋏は長さ62cm、厚さ0.7～0.8cmで、刃部先端をさらに2又に加工した



出土遺物 S=1/8

特異なものである。本調査は面積は狭いものの比較的まとまった遺物の出土をみたことで集落の広がり等を考える上で成果を得たといえる。

(勸栗東町文化体育振興事業団 佐伯 英樹)

6. 安養寺山麓で布留式併行期の竪穴住居と土坑を
栗東町安養寺 安養寺遺跡

本調査は近江最大の河川である野洲川が形成した沖積平野を望む安養寺山麓標高約116m～211mに位置する。この安養寺山では名神高速道路建設の際、初期馬具を副葬した新開1号墳をはじめとする複数の中期古墳が発掘され、安養寺古墳群として著名である。そのうちの山寺屋敷古墳は本調査地の同一尾根上に所在した。調査は宅地造成に先立ち5月8日から7月31日の間、約1,200㎡の面積で実施した。調査区は溜池を狭み約5mの高低差があり、上段の南側に接し名神高速道路が通過している。遺構は4世紀後半の竪穴住居1棟、土坑1基、7世紀末から8世紀の竪穴住居3棟、掘立柱建物3棟、13世紀から16世紀の土坑、掘立柱建物、溝を検出した。布留式新段階併行期の竪穴住居は1辺約4.5mで、東端に方形の貯蔵穴状土坑を持つ。主柱穴は認められないが壁溝内に小柱穴が密に認められた。

竪穴住居の東側2mには直径2m、深さ25cmの土坑が存在する。埋土は炭と焼土を多く含み、甕や小形丸底壺などの土器と供に炭化した桃核が25点ほど出土した。布留式併行期には沖積地に岩畑遺跡や辻遺跡等に集落が営まれており、その奥津城である丘陵地からの住居跡は初例であり興味深い。

その他15～16世紀の遺構では写真の手前と中央(切られているのが布留式期の住居)に長方形の土坑がみえるが伴に約4×2m、深さ1.3mの規模で手前の土坑流入土の炭層からは硯片、漆器碗、青磁器、香炉の他多量の鉄釘が出土した。調査地の東には1487年に足利義尚が布陣した安養寺が所在し、当地は小字山寺屋敷からその塔頭の存在が考えられており、これら土坑の



調査地上段の遺構完掘状況

他にも五輪塔や瓦の出土をみており寺院関連施設の存在した可能性は高まったといえる。

(勸栗東町文化体育振興事業団 佐伯 英樹)

7. 弥生時代の木柵組井戸
守山市守山町 二ノ畦・横枕遺跡

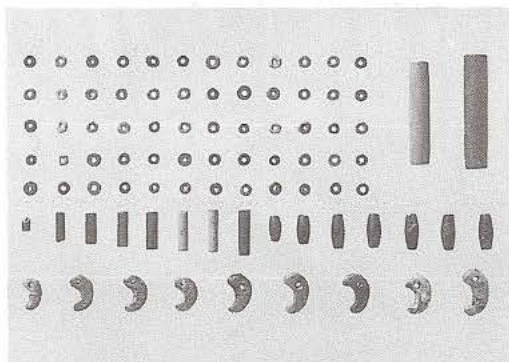
二ノ畦・横枕遺跡は過去に26回の調査がおこなわれてきており、弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡であることがわかっている。なかでも弥生時代中期末の段階には、竪穴住居が40棟以上、掘立柱建物が3棟程検出され、集落の周縁には幅4m、深さ1～2mの環濠が掘られていることが明らかになっている。今回の調査地は、その環濠集落の内側東端部分に位置している。検出された遺構には、竪穴住居12棟、掘立柱建物1棟、井戸3基等がある。検出された井戸のうち1基は素掘りのもので、残りの2基には井戸の最深部分に木柵が施されていた。木柵組の井戸について、ここでは仮に井戸Aと井戸Bとして記述する。井戸Aは井戸口の部分で直径3.1m×3.7mの円形で、深さは2.9mを測る。底の部分には、16枚の縦板が打込まれ、それが内側に崩れないように横棧(桁形に板材を組んでいる。)で固定されていた。縦板は、柾目に木取りされており、きわめて保存状態の良いものである。出土した縦板材2本を年輪年代学により分析した結果、その2本がともに紀元前97年に伐採された板材(辺材部分が完存)であることが判明した。井戸Bは、井戸口は直径約3mの円形で、深さは3.2mを測る。底の部分には、縦板が9枚垂直に打込まれた状態で存在し、横棧は残っていない。板材はかなり傷んでいたが、その内の一枚を分析した結果、紀元前60年に伐採された板材であることが判明した。井戸Aについては、木柵内埋土中より畿内第IV様式後半代併行の鉢(壺)破片が出土し、井戸Bについては、最下層と木柵の裏込め土中よりIV様式末の壺や甕の破片が出土した。いずれも弥生時代の暦年代を考察するうえで重要な資料を提示したこととなる。



紀元前97年の年代が出た井戸柵(井戸A)

8. 弥生時代後期の大集落

守山市 伊勢・大洲遺跡



破砕鏡と伴出した玉類

平成6年度より継続して調査を進めていた伊勢・大洲遺跡も、平成7年8月をもって現地調査を終了した。今回の調査地点は、弥生時代後期の環濠集落と推定される伊勢遺跡の中でも地形的に最も高所に位置している。同地点の特色を以下列記し、概要を報告したい。

- 1、南北方向を軸とする1間×5間(梁行4.6m、桁行9m)を測る大型建物(独立棟持柱付)が2棟、新たに検出された。切り合い関係などからみて、この調査域では最も古い遺構である。
- 2、さらに3,000をこえる柱穴群が検出され、掘立柱建物がかかりの数、存在していたものと考えられる。柱穴群は、断面形態、残存深度はさまざまで、径15~80cmをこえるものもあり、相対的に規模は大きいものである。
- 3、これらの柱穴群が営まれたのち、この地域に竪穴住居群がみられるようになる。竪穴住居は一辺4mの小型のものから、一辺9.4mを測る大型のものまで、さまざまである。基本的には4本の主柱穴をもち、周壁溝がめぐり、一辺の中央あるいはコーナーに土坑をもつものである。出土土器からみて、弥生時代後期末から古墳時代前期末にかけて、計10棟の竪穴住居が営まれたと考えられる。
- 4、竪穴住居上には15~20cmの遺物包含層が堆積していて、徐々に埋没していった様子が伺われる。この包含層の上で、浅いピットが検出されている。径10cm程の小規模なものであるが、この中から、管玉10個、ナツメ玉7個、勾玉9個、白玉60個が出土している。さらに、径3cm程と推定される素文鏡が破砕された状態で出土した事から、何らかの祭祀が行なわれた事が推測された。
- 5、古墳時代前期末に集落活動が終了したとみられ、この地に再び人が住み始めるのは中世になってから

9. 前方後方形周溝墓の調査

守山市古高町 塚之越遺跡

塚之越遺跡は守山市の南端に位置している。周囲には縄文時代から中世にかけての集落が検出された下長遺跡、中世の集落遺跡である二町鏡遺跡や栗東町に位置する弥生時代後期の方形周溝墓群が検出された糺遺跡が存在する。

今回の8次調査は民間の倉庫建設に先だつもので、約750㎡を対象として行なった。検出した遺構は、縄文時代中期末の石器や土器、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土拵墓2基、方形周溝墓4基、前方後方形周溝墓1基、古墳時代後期の溝や中世の掘立柱建物である。以下、方形周溝墓、前方後方形周溝墓、土拵墓について報告する。

方形周溝墓は、4基とも軸をほぼ同じとして築かれており、溝の深さや幅は各墓とも異なっている。出土した遺物より後期後半に築かれたと考えられる。前方後方形周溝墓は、周溝の断面観察の結果、方形周溝墓2の周溝が埋没した後に掘削されたことがわかった。規模は、全長23m(推定)、後方部幅17.7m、後方部長15m(推定)、前方部幅7.5m、前方部長8.7mを測る。周溝は前方部側で幅広く掘削されており、深さは深い所で50cmで浅い所で10cmほどしか残存していなかった。時期は、周溝内より出土した土器より弥生時代終末から古墳時代前期と考えられる。土拵墓のうち1基は、底に木棺痕跡らしきものが確認できた。遺物は出土しなかったが、他の遺構とほぼ同時期だと考えられる。

前方後方形周溝墓は、滋賀県ではこの時期野洲川流域に集中することから、古墳出現期の地域的な特色が読みとれる可能性がある。また、当時の集落域でもある下長遺跡との関連で、集落域と墓域の有機的な関係、そして、同じ墓域内に異なった形態の墳墓をほぼ同一時期に築造していることから、当時の社会的階層構造をさぐる上でも重要である。



前方後方形周溝墓完掘状況

10. 中世富波荘の一面を調査

野洲町富波甲 三堂遺跡

前年度に引き続いて東込田川の改修に先立ち約2000㎡を対象に発掘調査を行った。

検出した遺構は掘立柱建物・礎石建物・溝・井戸・土坑・畦畔跡などである。出土遺物は、石器（打製石斧）・埴輪・土器（古式土師器、須恵器、黒色土器、土師器、不明土製品など）・瓦・輸入陶磁器（青磁・白磁）・木器（曲物・箸など）が出土している。

遺構に伴う遺物は鎌倉時代のものが大半であり、先行するものの大半は鎌倉時代の埋め土に混入するものである。遺構は14世紀を境に顕著なものは見られなくなり、室町時代には溝のみが存在するようであり居住域から生産域へと変化していった可能性が指摘できる。その後、年代を決定することは困難であるが、土層断面には10cm以上の洪水砂の堆積がみられる。調査区に隣接して存在していた流路（旧家棟川）固定時期の下限を想定することができる。

遺物の大半は黒色土器や土師器といった供膳形態をとる土器類で、壺・甕等の煮沸具や貯蔵具の出土率は極めて低い。これらのコンテナ約2,000箱を数える膨大な供膳具は土坑、井戸からの良好な一括資料に恵まれ大きく4段階に大別することができ、周辺遺跡の事例に対応させると12～13世紀にかけての所産であると考えられる。また、不定形の粘土塊が多量に出土しており、土器の焼成が行なわれていた可能性も指摘できる。

調査面積の制約から集落の様相そのものを把握することはできなかったが、12～13世紀の土器生産が行われた可能性が指摘できる点と当該地域は中世富波荘の一面にあたる考えられており、12世紀にいたって積極的に居住域化した点と、14世紀以降畑や水田といった生産域化した点、旧家棟川の流路固定の下限を想定し得た点が今回の調査の成果といえる。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 畑中 英二)



12～13世紀の掘立柱建物跡

11. 百々橋口道とその周辺郭群および主郭南面地区 安土町下豊浦 特別史跡安土城跡



百々橋口道南側部に検出された建物の雨落溝

平成7年度の発掘調査は二王門以下の百々橋口道とその周辺郭群および主郭南面地区の約19,750㎡を対象として実施した。調査は、百々橋口道についてはそのルートと規模・構造の解明、周辺郭群および主郭南面地区については遺構の有無等を含めた実態の解明を目的に、主としてトレンチ調査を実施した。

調査の結果、百々橋口道では道幅の変更や石段の踏石の積み直しなど、若干の改修の痕跡が確認できた。しかしながらルートの変更については認めにくく、現道は当初のルートを踏襲している可能性が高くなった。

百々橋口道周辺郭群については建物の雨落溝、石墨や石段、敷石を伴う虎口、また飛石状遺構などを検出した。このうち虎口にはその内側に石墨や溝を増設するなどの改修痕も認められる。ただし建物の存在を直接に示す確実な礎石は検出されず、遺物の出土量も少ない。

主郭南面地区については大手道直線部を延長した谷筋において、大手道とは別の幅約4.2mの南北道の存在を確認した。この道はつきあたりの石垣間に設けられた犬走り状の道を通り、主郭外周道とつながることも判明した。この主郭外周道は黒金門の手前で大手道から分岐した脇道に接続して本丸裏門跡につながる。またこの南北道を下ると、東側の郭群中をぬけ、伝江藤邸北側の切り通しに出ることから、幹線道と推測される。(滋賀県安土城郭調査研究所 北村 圭弘)